

オーストリア・ブルゲンラント州におけるハンガリー人 マイノリティの言語問題： ドイツ語との二言語使用状況に関する調査および考察¹

大島 一 (おおしま・はじめ)²

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立国語研究所 コーパス開発センター
プロジェクト奨励研究員³

0. 研究の概略と目的

本研究は、オーストリア共和国ブルゲンラント州に居住するハンガリー語話者マイノリティについて、その言語・社会的状況を調査するとともに、彼らの母語であるハンガリー語(西部方言、またはブルゲンランド方言)についても考察する。当地のハンガリー語話者はオーストリアの国家語であるドイツ語に囲まれ、いわゆるドイツ語とハンガリー語の二言語使用状況にあり、先行研究でも指摘されている通り、ハンガリー語話者は若者をはじめとして急激な速度でドイツ語にシフトしつつあり、遅かれ早かれ、この地のハンガリー語話者は存在しなくなると言われる。こうした状況が現在においてもそうであるか否かを実際のフィールド調査により明らかにすること、そしてその言語シフトの根底に流れる諸要因を解明することが目的である。

また、こうしたハンガリー語話者の現状を鑑み、その言語データの保存を提示する。当然ながら、その主張の理由を言語・社会的な理由から議論する。

以下に、当報告の構成を示す。

¹ 当研究は、北海道大学スラブ研究センターによる公募共同研究「平成20年度 スラブ・ユーラシア地域(旧ソ連・東欧)を中心とした総合的研究」の助成を受けている。また、本稿は、ウラル学会第36回研究大会(2009年7月11日、於、京都産業大学)での報告者による発表「オーストリア・ブルゲンラント州のハンガリー語話者言語データの保存に関する試み：電子コーパス構築における諸問題」を元に、2009年8月31日～9月6日の期間に現地調査した結果を加え、大幅に加筆修正を加えたものである。

² hoshima@ninjal.ac.jp または、 hazsime@gmail.com

³ 独立行政法人国立国語研究所は2009年10月に大学共同利用機関法人人間文化研究機構(<http://www.nihu.jp/>)に移管した(この移管にあたり、職位がプロジェクト奨励研究員に変更)。

1. ブルゲンラント州(オーストリア)におけるハンガリー語話者
 - 1.1. 歴史的背景
 - 1.2. オーバーヴァルトにおけるハンガリー語話者の人口推移
 - 1.3. ハンガリー語話者の現象について
 - 1.4. ハンガリー語話者減少に対するいくつかの試み
2. 二言語使用
 - 2.1. 先行研究によるハンガリー語話者の二言語使用状況
 - 2.2. 現在におけるハンガリー語話者の二言語使用状況
 - 2.3. 考察
 - 2.4. 調査結果の結論
3. ブルゲンランド方言
 - 3.1. ハンガリー語の方言分布におけるブルゲンランド方言の位置づけ
 - 3.2. ブルゲンランド方言の特徴
4. ブルゲンランド方言の電子化作業: その理由と目的
 - 4.1. 方言の「死」の前に
 - 4.2. ドイツ語からの影響(ゲルマニズム)
 - 4.3. ハンガリー語コーパスおよびブルゲンランド方言データベース
5. まとめ

1. ブルゲンラント州(オーストリア)⁴におけるハンガリー語話者

1.1. 歴史的背景

現在、オーストリア共和国ブルゲンラント州は、1920年までハンガリー(王国)領であった。したがって、それまではハンガリー人が支配民族だったのである。その後、第一次

⁴ Burgenland(ハンガリー語名は Felsőőrvidék または Őrvidék)は1920年よりオーストリア共和国の州の一つ。人口は約28万人(2006年現在)。州都はアイゼンシュタット(Eisenstadt ハンガリー語名は Kismarton)。

この「ブルゲンラント(Burgenland)」という名称は1920年、つまり、第一次大戦後、この地がハンガリーからオーストリアに割譲されたときに初めて造られたものである。割譲されたハンガリー西部の県はドイツ語では Pressburg(ポジョニユ県), Wieselburg(モション県), Ődenburg(ショブロン県), Eisenburg(ヴァシュ県)と言い、すべて語尾に -burg(ドイツ語で「城」の意味)がついているため、Burgのland(土地)、ということで「Burgenland(ブルゲンラント)」と名付けられた。また俗説として、この地域はオスマン帝国の侵入による被害をあまり受けなかったため、各地に城(Burg)が破壊されずに多く残っているという事実由来の呼称とも言われる。

ハンガリー語話者は注6で述べるオーバーヴァルト(Oberwart)付近や、オーバープッレンドルフ(Oberpullendorf 洪:Felsőpulya)に集中している。

世界大戦におけるオーストリア・ハンガリー二重君主国の敗北により、ハンガリー周辺には多くのハンガリー系住民が少数民族となって取り残されたのであるが、そのうちのひとつとして現在のオーストリア東部にあるブルゲンラント州はハンガリーからオーストリアに割譲されることとなった。支配が変わったことにより、ハンガリー系住民は、ハンガリー語とドイツ語の二重言語生活を営むこととなったのである。

ブルゲンラント州の民族比率においてその殆どがドイツ系であり、2001年の国勢調査によれば、同州において6,641人が「ハンガリー語話者」と申告している。これは州全体の約2.3%である⁵。ハンガリー系住民は主にオーバーヴァルト(Oberwart; ハンガリー語名はFelsőőr)⁶とその周辺に固まっている。本稿は、特にこのオーバーヴァルトに居住するハンガリー系住民に焦点をあて説明するものである。

1.2. オーバーヴァルトにおけるハンガリー語話者人口の推移

まず、先行研究で示されたオーバーヴァルトにおけるハンガリー語話者人口のデータを紹介する。

(1) オーバーヴァルトにおける話者人口(1880~1971)(Gal, 1979:26)

Year	Hungarian	German	Mixed	Croatian or other	Total
1880	2701	999			3700
1910	3039		1148		4187
1920	3138		965		4103
1934	2176	2008			4833
1939	1482				
1951	1603	2854	577		4713

⁵ www.statistic.at

⁶ オーバーヴァルト(Oberwart 洪:Felsőőr)は注3で述べたブルゲンラント州のOberwart郡における中心地。街はピンカ川(Pinka)沿いに位置している。名称のOberwartはハンガリー語名Felsőőrからの借用翻訳(「国境地帯の監視」という意味)。1327年にSuperior Eőrという名称で初出。当時のハンガリーの西部国境の監視地域であり、その住民は屯田兵であったことをうかがわせる。16世紀に住民はプロテスタントに改宗。17世紀にはハンガリー内における対オーストリア独立運動側に立ち戦う。ハンガリー語話者はこのオーバーヴァルトの他、近隣であるウンターヴァルト(Untervart 洪:alsóőr)や、シゲト・イン・デア・ヴァルト(Siget in der Wart 洪:Őrisziget)にも居住している。

1961	1206	3011	424	99	4740
1964	1934	2726			
1971	1486		4175		5661

オーバーヴァルトでは1920年には全人口の76.5%がハンガリー語を話していたが、1971年には26.3%となってしまった。通してみると、1920年までは増加傾向にあったのに対し、1920年以降は減少傾向にある。これには、第一次大戦後、ブルゲンラントのオーストリアへの割譲が大きく影響を与えたことは容易に想像できる。そして、この減少傾向は以下の2001年の国勢調査でも同様である。

(2) オーバーヴァルトにおける各言語話者数(2001)

Year	Hungarian	German	Croatian	Romany	Total
2001	1169	4889	233	84	6696

以上のように、2001年現在、オーバーヴァルトの総人口6,696人中、ハンガリー語話者人口は1,169人、つまり、約17.5%まで落ち込んでしまった。この減少傾向に今後も歯止めがかからないようである。

1.3. ハンガリー語話者減少について

先に述べた歴史的に大きなイベントであった、第一次大戦後の領土変更により、この地がハンガリー(=ハンガリー語)からオーストリア(=ドイツ語)に割譲されたということが、その話者人口の減少の大きな一因と考えられるが、そのほかに、ハンガリー語話者減少傾向の大きな原因の一つとして、農村型生活から都市型生活への移行が考えられる。これに伴い、使用言語もハンガリー語からドイツ語へシフトすることになる。よって、ハンガリー語話者においてドイツ語の習得問題が発生する。この解決として、ドイツ人との結婚、つまり族外結婚が選択される。

1.3.1. ハンガリー語話者の生活状況

1960年代末からこの地における農民共同体は少なくなった。現在、オーバーヴァルトの

ハンガリー語話者において専業農家はたった5戸のみであり、他は兼業農家である⁷。農村型生活の崩壊、そして都市型生活への移行により、労働世代は都市での仕事に従事するため、ドイツ語を習得する必要がある。この結果、高齢者のハンガリー語話者のみが残ることになる⁸。

1.3.2. 族外結婚

上記のとおり、ハンガリー語話者は、生活のため、ドイツ語を習得する必要性が生まれるが、その目的の為に最も容易な手段は、ドイツ語話者と結婚することであろう。いわゆる「族外結婚」である。このことについて、シゲト・イン・デア・ヴァルト⁹に住むハンガリー語話者によると

「若者は *vegyes házasság* (ハンガリー語で「混交結婚」という意味) により、夫婦のうちどちらかがドイツ語話者であれば、その家庭内言語はドイツ語となる。なぜなら、ドイツ語話者はハンガリー語を覚えようとはしないから。よって、その子たちもドイツ語を母語として成長することになり、ハンガリー語話者の数は減っていく...」

とのことである。この「族外結婚」に関しては、先行研究でも以下のとおり示されている。

(3) オーバーヴァルトのカルヴァン派信者における族外婚の割合 (Gal,1979: 52)

Year	Percentage of Exogamous	Total Number of Calvinist
	Marriage	Marriage
1896-1900	20	66
1901-1905	15	65
1906-1910	22	63

⁷ 平日は首都であるウィーン、アイゼンシュタット、グラーツ(シュタイアーマルク州の州都)に出稼ぎに行き、週末のみオーバーヴァルトで農業に従事する(オーバーヴァルトには仕事がないため)。

⁸ 報告者が過去に参加した2006年9月11日(日)のカルヴァン派のハンガリー語礼拝では92人が参加(全員ハンガリー語話者)。そのほとんどが60代以上の高齢者であり、見回したところ20代、30代は数人程度であった。当教会の牧師によると毎週の礼拝における10代の参加者は6~12人程度とのこと。

⁹ オーバーヴァルトより南東数キロのところを位置するハンガリー語話者の村。人口約280人のうち、その9割がハンガリー語話者という。名称のとおり、ドイツ語地域の中に浮かぶハンガリー語の言語「島(sziget)」である。

1911-1915	31	45
1916-1920	25	80
1921-1925	23	57
1926-1930	31	59
1931-1935	37	51
1936-1940	29	59
1941-1945	34	47
1946-1950	27	111
1951-1955	38	66
1956-1960	48	64
1961-1965	50	58
1966-1970	82	66
1971	79	14
1972	65	17

1.4. ハンガリー語話者減少に対するいくつかの試み

以上のような減少傾向に対し、オーバーヴァルトのカルヴァン派教会¹⁰においてハンガリー語維持運動が展開されている。毎週日曜のハンガリー語の礼拝はもとより、水曜にはハンガリー語の聖書の読書会が行われている。また、毎年のハンガリー語による演劇開催は特に若者に好評という¹¹。

また、ハンガリー語はブルゲンラント州において、クロアチア語と共に公的言語として認められている。さらに、オーバーヴァルトには「二言語ギムナジウム (Zweisprachiges

¹⁰ カルヴァン派教会 (Reformierte Kirche Oberwart, Felsőöri református templom)の牧師 (Pfarrer, lelkész)は Gúthy László (グーティ・ラースロー)氏。ハンガリーの Szolnok 生まれ (ハンガリー人)。1992年より当教会の牧師に着任。当教会ホームページは、<http://www.ref-kirche-oberwart.com/> (独, 洪, 英語による)。当教会は「オーストリアでも最古のプロテスタント教会。16世紀に創設, 現在1,400名の信者を持つ。礼拝はハンガリー語とドイツ語で行われている」(上記HPより)。牧師の個人的談話では「10年後にはこの地のハンガリー語話者は絶滅するだろう」とのこと。

¹¹ オーバーヴァルトはハンガリーとの国境に近いので, 経済的見地からハンガリー語を学んでいる若者が少なからず存在する。実際に町には多くのハンガリー人が国境を越えてオーバーヴァルトに買い物に来る姿が見られる。

Bundesgymnasium Oberwart, Felsőöri kétnyelvű szövetségi gimnázium)¹²が存在し、「ハンガリー語・ドイツ語」のクラスがあり、ハンガリー語維持教育機関として機能している。しかし、ハンガリー語話者がかなり減少した今となつては、これらの政策は遅きに失した観は否めない(Cillia, R., Menz, F. Dressler, W. & Cech, P., 1998: 31)。

さらに、オーバーヴァルトには「ブルゲンラント・ハンガリー文化協会 (Burgenländisch Ungarischer Kulturverein, Burgenlandi Magyar Kultúregyesület)¹³が、ハンガリー語・文化維持のため様々な活動を行っている。季刊誌の発行や、ハンガリー本国の国民の休日・キリスト教の祝日におけるイベント活動が挙げられる。こうした地域発信のハンガリー語維持活動に関しては、Szoták (2006)が詳しいが、彼女も「こうした活動は彼らのアイデンティティの“かけら”なのである」と述べているように、今後のハンガリー語話者の増加、ハンガリー語の復権というレベルで考えていないことは明らかである。

2. 二言語使用

二言語使用 (bilingualism)とは、『言語学大辞典：術語編』によれば、

「ある人間ないし人間集団が2つの言語を使用すること、ないしその能力を bilingualism (バイリンガリズム) という。3つ以上の言語の場合は多言語使用 (multilingualism, plurilingualism) という。一般概念としての多言語使用は二言語使用をも包含するが、文脈によっては、逆に二言語使用という用語で2つ以上の言語の場合をも含めて論じる場合がある。」

と定義される。オーストリア・ブルゲンラント州のハンガリー語話者においては、母語であるハンガリー語と、オーストリアの国家語であるドイツ語の二言語を使用する状況にある。この二言語は話者の恣意的な判断により選択・使用されているのではない。すなわち、

「2つの言語のあいだに、明瞭な社会的機能分化がみられ、またそれが、(経済政治的、あるいは歴史文化的な) 優位劣位ないし価値の高低と連動している場合を、

¹² <http://www.bg-oberwart.at/>

¹³ <http://www.bukv.at/>

特にダイグロシア (diglossia, 二変種使い分けとも)とよぶ。ただし、ダイグロシアの概念は、ある言語の方言間(文語と口語、標準語と非標準方言など)の機能分化の場合をも含む。」(『言語学大辞典: 術語編』より)

とのことである。実際に当地のハンガリー語話者がどのような言語状況であるか、以下では先行研究の調査結果をもとに説明する。

2.1. 先行研究によるハンガリー語話者の二言語使用状況

以下はこの Gal (1979)において示されたオーバーヴァルトのハンガリー語話者たちが、会話の相手に応じて、ハンガリー語とドイツ語をどのように選択しているか(=コード・スイッチング)を調査した結果である。

(4) オーバーヴァルトにおける言語選択 (Gal, 1979: 135)

Speakers	Age of speakers	Interlocutors										
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
A	14	H	GH		G	G	G			G		G
B	15	H	GH		G	G	G			G		G
C	17	H	GH		G	G	G			G		G
D	25	H	GH	GH	GH	G	G	G	G	G		G
E	27	H	H		GH	G	G			G		G
F	25	H	H		GH	G	G			G		G
G	42		H		GH	G	G	G	G	G		G
H	17	H	H		H	GH	G			G		G
I	20	H	H	H	H	GH	G	G	G	G		G
J	39	H	H		H	GH	GH			G		G
K	22	H	H		H	GH	GH			G		G
L	23	H	H		H	GH	H		GH	G		G
M	40	H	H		H	GH		GH	G	G		G
N	52	H	H	H	GH	H		GH	G	G	G	G

O	62	H	H	H	H	H	H	GH	GH	GH	G	G
P	40	H	H	H	H	H	H	GH	GH	GH		G
Q	63	H	H		H	H	H	H		GH		G
R	64	H	H	H	H	H	H	H	GH	GH		G
S	43	H	H		H	H	H	H	G	H		G
T	35	H	H	H	H	H	H	H	GH	H		G
U	41	H	H	H	H	H	H	H	GH	H		H
V	61	H	H		H	H	H	H	GH	H		G
W	54	H	H		H	H	H	H	H	H		G
X	50	H	H	H	H	H	H	H	H	H		G
Y	63	H	H	H	H	H	H	H	H	H	GH	G
Z	61	H	H		H	H	H	H	H	G	GH	G
A1	74	H	H		H	H	H	H	H	H	GH	H
B1	54	H	H		H	H	H	H	H	H	GH	H
C1	63	H	H	H	H	H	H	H	H	H	GH	H
D1	58	G	H		H	H	H	H	H	H		H
E1	64	H	H		H	H	H	H	H	H	H	H
F1	59	H	H	H	H	H	H	H	H	H	H	H

話し相手 (interlocutor) のカテゴリは以下の通り :

- (1) 神
- (2) 祖父母およびその世代
- (3) やみ取引のおとくいさん
- (4) 両親とその世代
- (5) 仲間, 近隣の同年輩
- (6) 兄弟姉妹
- (7) 配偶者
- (8) 自分の子供とその同世代

(9) 政府の役人

(10) 孫とその世代

(11) 医者

Hはハンガリー語(Hungarian)、Gはドイツ語(German)使用を意味する(GHはドイツ語とハンガリー語両方あり得る)。また、空欄は回答が不適格であったことを示す。話者数32人、その内訳は男性14人で女性18人である(以上、当該表付随の注釈から)。

この調査結果から分かることは、まず世代間の傾向である。若者(20歳未満のA, B, C)はドイツ語を使用し、老人(60歳以上のA1, C1, E1など)はハンガリー語を使用することが簡単に見て取れる。また、使用領域の問題を見ると、教会(神)、家庭内、仲間うちではハンガリー語がよく使われ、役人や医者など公的機関ではドイツ語が優勢であることが分かる。

Gal(1979)はオーバーヴァルト村におけるドイツ語とハンガリー語の二言語使用において、その選択の決定的要因とは「都市性」と「農村性」にあると説明する。その調査対象者の半分以上が医者や政府の役人と話す場合にはドイツ語を使用するというデータが証明しているように、「都市性」をあらわす(つまり医者や役人といったインテリ)のがドイツ語である。また、この土地の住民はほとんどが農民であり、家族や同僚と話す際はハンガリー語を使用している事実から「農村性」とはハンガリー語を使用することである。したがって、場面が公的な性格をもつほどハンガリー語を使用する割合が減り、ドイツ語の使用度が高まるわけである。

このようなデータはオーストリアのブルゲンラント州のオーバーヴァルトにおけるハンガリー語とドイツ語の関係が「ダイグロシア(diglossia, 言語変種使い分け)」の関係にあることを示している。つまり、L変種(Low)に相当するのがハンガリー語で、家族や教会など、私的空間である身近な人間関係の場において使われる。それに対してH変種(High)はドイツ語であり、公的な外部の人間とのコミュニケーションに使用される。

しかし、Ferguson(1959)による“Diglossia”の定義によれば、ダイグロシアとはH変種とL変種の安定した言語使用状況を指すものである。先行研究の指摘のとおり、L変種のハンガリー語の使用領域が減少している状況であれば、それは当地のハンガリー語話者の

二言語使用状況はダイグロシアとは言えない。実際にドイツ語への言語シフトが起こっているのである。シフトの結果、待っていることとは、ハンガリー語の使用状況の消滅、すなわち、ハンガリー語話者がいなくなるということである。

この Gal (1979)の調査結果を経て、Romaine (1994)は以下のように解説を加えている：

「しかしこの予想どおりに、かならずしもハンガリー語が死に絶えてしまうだろうと結論づけることはできない。もしかしたら、個々人の年齢に関して、循環的に起こる減少をあらわしているだけなのかもしれないのである。つまり、話し手は歳をとるにつれ、どちらの言語を選ぶかのパターンを規則的に変えるのかもしれない。だから若いときはどの世代もドイツ語を話すことが多いが、歳をとるとハンガリー語に切りかえるのかもしれない。あるいは、ひとつの世代のなかでは、歳をとってからもおなじ言語をずっと使い続けるが、それぞれの世代が、前の世代とはちがう言語を使うのかもしれない。さらにはまた、話し手は一生の間ひとつの言語しか使わないというパターンから、若いときにはより多くのドイツ語を使う(しかし、かならずしも歳をとったらハンガリー語にもどるというわけではない)という新しいパターンに、変わりつつあるのかもしれない。言語の移行がさらに進行したかどうかをたしかめるために、あとで追跡調査を行う必要がある。」

Gal (1979)の調査はすでに30年以上も前のものである。Romaine (1994)が言うように、現在においてどうであるか、それを実際に調査する必要があると思われる。

次節では報告者が実際に当地でインタビュー・アンケート調査の結果を示し、その結果に対して考察する。

2.2. 現在におけるハンガリー語話者の二言語使用状況

2.2.1. インタビュー・アンケート調査結果

以下の表は、報告者が2009年8月31日～9月6日までのオーバーヴァルト滞在中において実施したインタビューおよびアンケート調査の結果である。横軸の話し相手1から11は、以下の通り：

- (1) 神
- (2) 祖父母およびその世代
- (3) 市場にて
- (4) 両親とその世代
- (5) 仲間, 近隣の同年輩
- (6) 兄弟姉妹
- (7) 配偶者
- (8) 自分の子供とその同世代
- (9) 市の職員
- (10) 孫とその世代
- (11) 医者

すなわち, 先行研究の Gal (1979)の調査結果とほぼ一致する. ただし, Gal (1979)の(3)は「やみ取引のおとくいさん」であったが, これは現在では見あたらないので, 上記のとおり, 「市場にて」に変えてある. また, (9)「政府の役人」は, 「市の職員」とした¹⁴.

(5) オーバーヴァルトにおける言語選択 (2009年)

話者	年齢	性別	話し相手										
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
A	13	男	HG	HG	G	G	G	G	-	-	G	-	G
B	13	女	GH	GH	G	G	G	G	-	-	G	-	G
C	14	男	GH	GH	G	GH	G	G	-	-	G	-	G
D	14	男	G	GH	G	G	G	-	-	-	G	-	G
E	14	男	GH	GH	G	G	G	-	-	-	G	-	G
F	14	女	G	G	G	G	G	G	-	-	G	-	G
G	14	女	G	G	G	G	G	G	-	-	G	-	G
H	14	女	HG	GH	G	GH	G	-	-	-	G	-	G
I	15	男	G	GH	G	G	G	G	-	-	G	-	G

¹⁴ ここでいう「市」とは, オーバーヴァルト (Oberwart)市のことである.

J	15	男	G	GH	G	G	G	-	-	-	G	-	G
K	19	女	H	H	HG	HG	H	H	H	-	G	-	G
L	46	男	G	H	GH	GH	GH	G	G	GH	G	GH	G
M	46	女	HG	GH	H	H	GH	H	H	HG	G	-	GH
N	50	男	HG	HG	HG	H	GH	G	G	G	GH	G	G
O	53	女	H	H	HG	H	GH	G	G	H	G	G	G
P	56	男	HG	-	GH	H	GH	HG	G	GH	G	-	G
Q	63	女	HG	-	G	H	HG	H	H	HG	G	G	G
R	63	女	HG	H	G	H	HG	H	H	G	G	GH	G

調査は、先行研究である Gal (1979)と同じく、当該の話し手に対し、主に使用する言語を問うたものである。Hがハンガリー語を示し、Gがドイツ語使用を意味する。また、GHおよびHGとあるのは、どちらも半々の割合で使用する場合である（先に来たもののほうが心持ち高いことを意味する）。なお、「-」は質問が対象者に当てはまらないため、回答出来なかったことを示している。

2.2.2. 調査における問題点および付記

上の表、18名のうち、10代が11名、他7名と大変にバランスが悪いことは否めない。ただし、この調査にあたっては大変な問題があったことを付記しておく。

当調査は、オーバーヴァルトのカルヴァン派教会牧師のグーティ・ラースロー氏の協力を仰いだ。彼の助力により、上記2名へのインタビューが実現できた。しかし、グーティ牧師が言うには「このような調査に住民はあまり協力的ではない」とのことであった。実際に、報告者が2009年9月6日の日曜礼拝の際、礼拝に来たハンガリー語話者たちに直接アンケートを願い出たが「そんなことは意味のないことだ」と即答されてしまった。グーティ牧師は教会の仕事のかたわら、当地の二言語ギムナジウムで神学の授業を受け持っており、そのクラスで10代の若者にアンケートを実施することが可能となった。よって、10代以外のハンガリー語話者7名は当地のハンガリー語話者の中では例外的に好意的に協力してくれたと言える。

2.2.3. インタビュー調査

表内の Q(63歳女性)と R(63歳女性)の2名にはインタビューもあわせて行った。アンケート調査項目を質問し、それに関連する情報を述べてもらう形式で実施した。その中で興味深いものとして、子供の結婚状況に関係するものであった。

Q, Rともに、息子がいるが、彼らの結婚相手はみな、ドイツ語話者である。つまり、ドイツ語しか出来ない。Rには娘もいるが、その結婚相手はドイツ語話者であり、ドイツ語しか話せない。そして、その孫はオーバーヴァルトの「二言語ギムナジウム」に通って、ハンガリー語も勉強しているという。よって、孫に対しては主にドイツ語であるが、ハンガリー語で話すときもあるという。

QとR、それぞれに「子どもがドイツ語しか出来ない伴侶と結婚し、子供もドイツ語話者として生まれてきて、ハンガリー語は副次的な学習レベルであるという事実はどう思うか」と質問したところ、「それがこの時代の流れであるし、子どもたちがドイツ語話者を伴侶に選ぶことに反対するつもりは決してない」とのことであった。

2.3. 考察

今回の調査結果表を見て考えられることは、ドイツ語使用の領域が圧倒的であるということである。もちろん、上で述べた問題点にあるとおり、対象者の3分の2が10代の若者とは言え、30年前のGal(1979)の調査結果では、そのほとんどがハンガリー語使用であって、ドイツ語は(9)「政府の役人」(今回は「市の職員」)や(11)「医者」程度であったことを考えると、大きな変化があることは明白である。

市の職員や医者は、そもそもドイツ語話者が占める職という性格上、ドイツ語にならざるを得ない。これはGal(1979)から変化はないようである。ただし、最近ではハンガリー語が分かるドイツ語者の職員・医師もいるとのことであった。

対象者LからRは、先行研究のGal(1979)では20~30代に相当するはずだが、今回の結果との違いに注目してみたい。Gal(1979)において、20~30代のドイツ語使用領域は(9)「政府の役人」と(11)「医者」であったが、今回の調査ではLからRは、(2)「祖父母とその世代」、(4)「両親とその世代」にハンガリー語が出てくるのみであって、他はまずドイツ語が出現している。これはすなわち、LからRにおける話者たちは、同年代および若者である自分たちの息子や孫といった世代には必ずドイツ語を使用するということを意味する。

その結果、10代の若者たちの使用領域にはほぼドイツ語が現れることになる。彼らの中でハンガリー語を使う機会というのは、(2)「祖父母とその世代」程度であり、それは上で紹介したインタビュー調査におけるQとRが、「二言語ギムナジウム」でハンガリー語を学んでいる孫とハンガリー語で話すときもあるということを示していると思われる。

また、このアンケート調査において、多くのハンガリー語話者が非協力的だったことについて考えてみたい。ある高齢のハンガリー語話者は「いつもドイツ語を使っているから、調べてもドイツ語としか答えられない」と言っていた。確かに、生活のほぼ大半がドイツ語であることは簡単に予想がつく。至極当然の返答であろうが、それでも彼らはハンガリー語母語話者として生まれてきたわけであり、それを否定するかのような「ドイツ語しか使わないから」という答えはアイデンティティの保持ということに関して問題にならないだろうか。

これに対する答えは現段階では明らかなことは言えない。40代以上のハンガリー語話者においては、当地においてハンガリー語の維持が困難である事実には寂漠を感じていることは事実であると思われる。しかし、その一方で、ハンガリー語が生活の上で全く必要性を感じさせるものではなくなってしまうという事実がある。就職、結婚などにおいてドイツ語が選択されることが当然であることは既に述べたとおりである。40代以上のハンガリー語話者はハンガリー語を母語として生まれてきたわけであるが、その生活において急激な速度でドイツ語使用へと環境が変わったことを経験し、母語であるハンガリー語はほとんど使用する必要性を失ってしまった。つまり、ハンガリー語ネイティブといっても、それは実生活では必要のない要素であり、よって、こうしたことを掘り下げられるような今回の質問は心理的に喜ばしくないものだったのではないだろうか。Szoták(2006)の「アイデンティティのかけら」という言葉を借りれば、この“かけら”は堂々と公言できるようなものではないのかもしれない。

2.4. 調査結果の結論

以下に今回の調査をまとめる：

【1】ドイツ語：H変種、ハンガリー語L変種といった「ダイグロシア」ではない。

生活ほぼ大半、家庭内でも家庭外でもドイツ語が使用される現況は、すでに安定した二言語使用使い分けという状況にはない。ドイツ語への言語シフトも完了

しつつあり、あとはアイデンティティの問題が残るのみである。

【II】ハンガリー語はアイデンティティのかけら

日常生活のほぼ全てをドイツ語で暮らしている彼らにとって、ハンガリー語はもう必要ないものといって良い。しかし、孫の世代を「二言語ギムナジウム」でハンガリー語を勉強させているところから、そのアイデンティティは“かけら”程度のものでしかない。

【III】Romaine (1994)が示唆した予測結果はない：歳をとってもハンガリー語には戻らない

今回の調査結果で40代以上を見てみると、先行研究のGal (1979)当時と比較すると、使用領域のほぼ全域にドイツ語使用が進んでいる。すなわち、Romaine (1994)が示したいくつかの予測結果にはすべて至らず、予想通りにハンガリー語話者消滅、ドイツ語へのシフトが進んでいると言える。

3. ブルゲンランド方言

前節まで、オーストリア・ブルゲンラント州、とくにオーバーヴァルトにおけるハンガリー語話者の二言語使用状況について説明した。その結論として、調査結果をもとに、現況でもハンガリー語話者減少および今後の消滅は避けられないということが改めて確認できた。

以下では、こうした状況をもとに、当地のハンガリー語話者が話すハンガリー語、すなわち、ブルゲンランド方言をどう扱うかについて説明を加える。まず、ブルゲンランド方言について説明したい。

3.1 ハンガリー語の方言分布におけるブルゲンランド方言の位置づけ

ハンガリーとその周辺諸国に広がるハンガリー語の方言は以下の8つに分けられる。

(6) ハンガリー語の方言

- 1) 西部方言 (nyugati ; オーストリア地域を含む)
- 2) ドナウ以西方言 (dunántúli)
- 3) 南部方言 (déli ; ユーゴスラヴィア地域を含む)

- 4) パローツ方言 (Palóc ; スロバキア地域を含む)
 - 5) ティサ方言 (Tisza)
 - 6) 北東部方言 (északnyugati)
 - 7) メゼーシェーグ方言 (Mezőség)
 - 8) 東部方言 (keleti ; セーケイ Székely, チャーンゴー Csángó を含む)
- (『言語学大辞典：世界語編』「ハンガリー語」より)

ブルゲンラント州のハンガリー語話者のハンガリー語方言は上における 1) 西部方言 に含まれる。「ブルゲンランド方言 (A burgenlandi tájnyelv)¹⁵」と呼ばれる。

3.2 ブルゲンランド方言の特徴

この方言はその地理的位置や、既に説明したとおり第一次大戦の敗北後、1920年からオーストリア領となった経緯もあり、ドイツ語の影響を多大に受けている。例えば、音声の面では、ハンガリー語特有の ty [c] / gy [ɟ] は、cs [tʃ] / dzs [dʒ] で実現する：

- | | | | |
|-----|------------|--------------------------------|----------|
| (7) | 標準ハンガリー語： | kutya | 「犬」 |
| | | /c/ | |
| | ブルゲンランド方言： | kucsa | |
| | | /tʃ/ | |
| (8) | 標準ハンガリー語： | Gyere vacsorára! ¹⁶ | 「夕食に來い！」 |
| | | /ɟ/ | |
| | ブルゲンランド方言： | Dzsere vacsorára! | |
| | | /dʒ/ | |

これは、ドイツ語の子音に、ハンガリー語特有の子音である ty [c] / gy [ɟ] が存在しな

¹⁵ ちなみに、ドイツ語では単語末の有声子音は無声化されるので Brugenland は「ブルゲンラント」となるが、ハンガリー語ではそうした現象が発生しないので Brugenland は「ブルゲンランド」と濁って発音される。

¹⁶ ハンガリー語文法解説：

Gyere	vacsorára!
「来る」.命令法2人称単数	「夕食」-~の上へ(昇格語尾)
「夕食に來い！」	

いからである。また、標準ハンガリー語で単一の母音 o, e がその前に他の母音(的要素)をとめない、実現される。

- (9) o (標準ハンガリー語) volt 「あった(存在動詞の過去形)」
uo (ブルゲンランド方言) vuot
- (10) e (標準ハンガリー語) elmentem 「私は出かけた)」
je (ブルゲンランド方言) jelmentem (elmentem 「私は行った」)

音声面以外でも、文法的に異なるものがある。以下は複数所有表現の例であるが、標準ハンガリー語では【複数】-【所有】という語順であるに対して、ブルゲンランド方言ではその逆となる。

- (11) 標準ハンガリー語: lábaim (láb 「足」 + -ai (複数) + m 「私の」)
ブルゲンランド方言: lábamak (láb 「足」 + -am 「私の」 + -ak (複数))

4. ブルゲンランド方言の電子化作業: その理由と目的

4.1 方言の「死」の前に

先に述べたとおり、この地におけるハンガリー語話者は、今、急激な速度でドイツ語にシフトしている。今回の調査結果でも明らかになったが、遅かれ早かれ、この地のハンガリー語話者は存在しなくなるわけである。当該のハンガリー語話者たちにとっては、必要のない彼らのことば、すなわちブルゲンランド方言であるといえよう。では、言語学的見地からも、この方言の消滅を甘受してよいのかという疑問が残る。以下ではその理由と目的について説明する。

4.2 ドイツ語からの影響(ゲルマニズム)

当地におけるハンガリー語を調査する目的の一つとして、ハンガリー語における「ゲルマニズム(洪: Germanizmus)」の影響を明らかにすることがある。「ゲルマニズム」とは、ハンガリー語におけるドイツ語からの影響である。たとえば、動詞接頭辞におけるドイツ

語的用法や副動詞構文(コピュラと副動詞の組み合わせにより、結果状態を意味する)などはその代表的なものである。

- (12) a. Az ablak-ból ki-néz-ek.
定冠詞 窓-出格 外へ-見る-1.単
「私は窓から外を見る」
- b. Jól néz ki.
よく 見える 外へ
「彼(女)は良い外見をしている」

ハンガリー語には動詞に付き、その動作内容を規定・修飾する働きをもつ動詞接頭辞というカテゴリーが存在する。(12a)に見られる ki-「外へ」もその一つである。動詞 néz「見る」につく事により、ki(外へ)+néz(見る)で、「外を見る」という意味総和が得られる。しかし、この ki-néz は「外を見る」という意味だけでなく、(12b)にあるような、「～は良い外見(格好)をしている」という意味も持つ。これはドイツ語の *aussehen*「～のように見える」から影響を受けた結果だと言われる。

- (13) Az ablak ki van nyit-va
定冠詞 窓 外へ いる・ある 開ける-副動詞
「その窓は開けられてある」

この文は、他動詞文「窓を開ける」(az ablakot kinyitja)という動作の結果、「開けてある」状態であることを意味する。文末の -va は副動詞化接尾辞で「～しながら」という意味をもつが、このように、コピュラである van と組み合わせられることにより、日本語でいう結果状態の「～ている」と同価の表現を作ることができる。この表現を副動詞構文と呼ぶ。

- (14) a. ?Meg van ír-va.
[完了] いる・ある 書く-副動詞
「書かれてある(書かれたものがある)」

b. *A kép meg van néz-ve.
定冠詞 絵 [完了] いる・ある 見る-副動詞
「その絵は見られている(?)」

しかし、この(14)で示されるように、他動詞を副動詞化して、コピー動詞と組み合わせられることで、常にこの副動詞構文が生み出されるわけではない。(14a)はその文許容に問題があり、(14b)は明らかに非文法的である。こうした事実は、この副動詞構文自体が、ハンガリー語生粋の表現ではなく、周囲の言語から、特にドイツ語からの影響だと言われている。

以上の状況から、当地におけるハンガリー語、つまりドイツ語の影響を色濃く残すと考えられるブルゲンランド方言の記述はハンガリー国内の標準ハンガリー語における「ゲルマニズム」の実態を明らかにする為に多大な寄与が得られると考えられる。

4.3 ハンガリー語コーパスおよびブルゲンラント州方言データベース

ハンガリー本国におけるハンガリー科学アカデミー言語学研究所¹⁷では、ハンガリー語コーパス (Magyar Nemzeti Szövegtár)¹⁸が利用可能だが、これには国境外のハンガリー語話者のことばも採録されている。しかし、それは「2005年11月において公開されたのは、スロヴァキア、ザカルパチア、トランシルヴァニア、そしてヴォイヴォディナ」(当HPより)とあるように、オーストリア、すなわちブルゲンランド方言は未だ収録されていない。

しかし、今回の調査で明らかになったことだが、現在、Szoatak Szilviaらにより、ブルゲンランド方言の言語データ採集が進行中であることが分かった。これは「イムレ・シャム言語研究所 (Imre Samu Nyelvi Intézet)」¹⁹が中心となり、ブルゲンラント州の南部地域の3箇所でアンケート調査により言語採集が実施されている。

そして、その結果は、「国境外データベース (A határon túli adatbázis)」²⁰としてインターネット上で公開されている。このデータベースには、トランシルヴァニア、スロヴァキア、ヴォイヴォディナ、ザカルパチア、クロアチア、スロヴェニア、そしてブルゲンラントに

¹⁷ <http://www.nytud.hu/>

¹⁸ <http://corpus.nytud.hu/mnsz/>

¹⁹ <http://www.umiz.at/isnyi/>

²⁰ <http://ht.nytud.hu/htonline/>

居住するハンガリー語話者の言語データが登録されている。

5. 総括

以上、本研究では、オーストリア共和国ブルゲンラント州に居住するハンガリー語話者マイノリティについて、その言語・社会的状況を調査した。特にハンガリー語話者のドイツ語・ハンガリー語二言語使用状況に関して、先行研究の Gal (1979)の調査以来、30年後という現在において、その使用状況はどのようなものであるかを現地でのインタビューおよびアンケート調査により明らかにした。その結果、Romaine (1994)にあるような希望的観測での予測とは異なり、言語シフトから考えられる当然の帰結とも言うべき、ハンガリー語の消滅が実感できるような調査結果を得た。

今後、当該地の調査において残される課題は二つある。一つはハンガリー語話者のアイデンティティの問題である。彼らはハンガリー語を話すオーストリア国籍の人間なのか、それとも、ハンガリー語も話せるオーストリア人なのだろうか。私見では、後者である認識していると予測されるが、それは今後の課題である。もう一つの課題は、当地のブルゲンランド方言が格納されたデータベースが存在することから、それを利用した言語学的研究である。本論でも述べた通り、「ゲルマニズム」に関する問題解決に利用したい。

謝辞

今回の調査において尽力してくださったオーバーヴァルト・カルヴァン派教会のグーティ・ラーズロー牧師、ウンターヴァルト・メディア情報センターのケレメン・ラーズロー研究員、そしてハンガリー共和国大統領府戦略情報局のソターク・スィルヴィア審議官に感謝申し上げます。

参考文献

- Bakó Boglárka, Szoták Szilvia (eds.) 2006, *Magyarlakta kistérségek és kisebbségi identitások a Kárpát-medencében*. Budapest, Gondolat Kiadó.
- Bratt Paulston, Ch. & Peckham, D. (eds.). 1998, *Linguistic minorities in Central & Eastern Europe*, Clevedon: Multilingual Matters.
- Cillia, R., Menz, F. Dressler, W. & Cech, P. 1998, Linguistic minorities in Austria, in: Bratt Paulston, Ch. & Peckham, D. (eds.): *Linguistic minorities in Central & Eastern*

- Europe, Clevedon: Multilingual Matters, 18-36.
- Ferguson, C. 1959, "Diglossia", *Word* 15: 325-40.
- Fenyvesi, Anna. 1998, Linguistic Minorities in Hungary, in: Bratt Paulston, Ch. & Peckham, D. (eds.): *Linguistic minorities in Central & Eastern Europe*, Clevedon: Multilingual Matters, 135-159.
- Gal, Susan. 1979, *Language Shift: Social Determinants of Linguistic Change in Bilingual Austria*, Academic Press.
- Hudson, R. 1980, *Sociolinguistics*, Cambridge University Press.
- Kaplan, Robert B. & Baldauf Jr., Richard B.(eds.) 2005, *Language Planning & Policy: Europe, vol.1 Hungary, Finland and Sweden*, Clevedon: Multilingual Matters.
- É. Kiss, Katalin. 2002, *The Syntax of Hungarian*, Cambridge.
- Medgyes, P. & Miklósy, K. 2005, The Language Situation in Hungary, in Kaplan, Robert B. & Baldauf Jr., Richard B.(eds.): *Language Planning & Policy: Europe, vol.1 Hungary, Finland and Sweden*, Clevedon: Multilingual Matters, 22-116.
- Romaine, Suzanne. 1994, *Language in Society: An Introduction to Sociolinguistics*, Oxford University Press. (土田滋・高橋留美(訳)『社会のなかの言語：現代社会言語学入門』三省堂)
- Szoták Szilvia. 2006, Az identitás 'morzsái'. Örvidéki civil szervezetek a magyar nyelv és kultúra fennmaradásáért, in Bakó Boglárka, Szoták Szilvia (eds.) 2006, *Magyarlakta kistérségek és kisebbségi identitások a Kárpát-medencében*, Budapest, Gondolat Kiadó, 209-224.
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一(編)『言語学大辞典：世界語編』,三省堂.
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一(編)『言語学大辞典：術語編』,三省堂.